

緋色
の
六花

發
知

郁
哉

【人物一覧表】

遠山アキラ（17）：男子高校生

宮本チフユ（17）：女子高校生

中井シュン（16）：男子高校生

橋田（56）：軍人

理科教員

社会科教員

アキラの母

軍人 A

軍人 B

レインコートの男

監視塔の男

作業員 A

作業員 B

【あらすじ】

二〇四四年十二月二三日。

エネルギー効率で電気を遙かに上回り反重力技術も可能とするエネルギー「エーテル」の産業で成功した赤城諸島は戦後百周年記念祭を約一週間後の元日に控えていた。

赤城島高校に通う男子高校生の遠山アキラ（17）は同級生の中井シュン（16）と平和な日々を過ごしていたが、一方で度胸が足りない自分と向き合えずにいた。

夜の学校に忘れ物を取りに来たアキラはそこで変わり者のクラスメイト宮本チフユ（17）と鉢合わせる。校庭に停められていたチフユの車はエーテルによる飛行機能を有しているどころか「空間を歪める」というエーテルの特性から派生・研究された空間転移機能まで持ち合わせており、アキラはその初の実験に協力する。

しかし実験中の落雷事故からアキラとチフユは蒸気機関の栄えている並行世界へ飛ばされ

てしまう。

元の A 世界では石炭を活用したエーテル精錬施設であった第二島の廃工場が、こちらの B 世界では発展途上の技術である火力発電の廃試験場であることを知った二人はそれを活用しての帰還を試みる。

軍事基地への潜入作戦も、B 世界に暮らすもう一人のチフユの協力を得つつ大男の軍人橋田（56）を下して成功させ、帰還困難を引き起こしうる世界線の分岐を避けながら順調にことを進めるアキラとチフユ。

祭りが開催される元日。反軍の暴動に巻き込まれ、エーテル技術の結晶であるトランシーバーを軍に回収されてしまったアキラは再度軍事基地への潜入を敢行する。

第二島での不審機械（アキラとチフユの帰還用装置）の調査が軍により予定されていることが発覚したものの、アキラとチフユ二人、計三人の奮闘により、再度対峙した橋田を振り切り調査が入る前に A 世界への帰還作戦も

なんとか成功。

約一週間の留守を経て元の世界に帰ってきたアキラだが、母親やシユンは何事も無かったように接してくる。

留守中にまた別の並行世界からのアキラとチフユがA世界にやってきていたことが判明し、別世界のチフユの置き土産である小型発電ユニットを手に入れたチフユは、さらなる並行世界旅行にアキラを誘うのだった。

○赤城島高校・化学準備室（昼）

海が望める丘の上という抜群のロケーションを誇る赤城島高校、その一室。遮光カーテンが閉められ明かりも点いていない化学準備室に、備品を物色する一人の女子高校生、宮本チフユ（17）（以降、「チフユ」）の後ろ姿。

チフユ、スマートフォンをライトを片手に、物音を立てないよう慎重に棚の中を確認していき、低い位置にある何個目かの棚の戸を開け、その中身を取り出す。

「緋色金（ヒヒイロカネ・エーテル石）5kg」と書かれた白い袋を顔の前まで持ち上げ、ニンマリとした笑みを浮かべるチフユ。その大きな丸眼鏡に、袋が反射する。

チフユ、背負っていたリュックサックに袋を収め、窓のロックを外して扉の方へ歩き出す。

と、暗がりの床に置かれた何かが足先に当たる。

しゃがみこんでスマホのライトを向けるチフユ。

そこには木の箱が置いてあり、ラベルに「エーテル簡易製錬機 一九九五年四月」の文字。

チフユ「五十年前も前の……!!」

嬉々として箱を開き、装置を触り始めるチフユ。

○同・屋上（昼）

同時刻。

化学準備室の直上にあたる屋上。

さっぱりと晴れた冬の青空の下、十人ほどの生徒が昼食のために訪れている。その近くを数機の配達用反重力ドローンが飛んでいく。

屋上の隅、フェンス越しにスマホカメラで海を撮影する男子高校生、遠山ア

キラ（17）（以降、「アキラ」）。

アキラの近くに座りスマホのニュース記事をじっと見つめる、同級生の男子高校生、中井シュン（16）（以降、「シュン」）。

アキラ「えっ、空飛ぶ車実用化!!」

アキラ、シュンの方に駆け寄り座る。

シュン「らしいよ、最近一気に開発が進んだとか何とか。ついさっきの記事だね」

シュンのスマホ画面を覗き込むアキラ。
スマホ画面に「反重力車、実用化へ 軍の技術独占に高まる不満 二〇四四年十二月二三日」とのネット記事。

アキラ「あ良かったあ、朝のテレビで既に取り上げられてて周知の事実だったら今のリアクションで恥かくところだった」

シュン「今日も朝ギリギリ？」

アキラ「都合よく朝ギリギリで学校に間に合う電車があるのかな……。それより三本も早いのに乗るシュンに合わせるとかも

う天地が三周してもムリ」

シュン「三周しただけなら元の位置に戻って
きてるじゃん」

再度シュンのスマホ画面に視線を落と
したアキラ、笑みを浮かべ大きく息を
吐く。

アキラ「にしてもやっとかあ」

シュン「こういうの好きだもんね、まあ僕も
割と好きだけど」

アキラ「ただ民間で使えるようになるのはい
つになるかだなー」

シュン「まあ気長に、だね」

アキラ、軽くうなだれながら近くに置
いていた弁当箱を手に取り、地面に広
げる。

アキラ「あー誰か乗せてくんないかなー」

○同・化学準備室（昼）

ひと昔前の器具に夢中のチフユ。

廊下の方から準備室に近づいてくる人

の気配。

チフユ、我に返り袋から取り出していたエーテル石（緋色金）を手に持ったまま慌てて物陰に隠れる。

ほぼ同時に扉が開かれる。

理科教員「開いてる……？」

白衣を着た男性理科教員が化学準備室に足を踏み入れる。

理科教員「誰か使ってる？」

理科教員、一歩二歩とチフユの隠れる物陰の方へ進む。

大慌てであたりを見渡すチフユ。と、備品のライターが目にと留まる。

チフユ、手に持ったエーテル石に一瞬視線を落としてからライターを引っ掴み、エーテル石に火が触れる距離でライター点火。

くすんだ灰色であった緋色金が、火に触れて赤い光を放ち始める。

理科教員「閉め忘れかな」

理科教員、あと二、三步でチフユの隠れる物陰へ到達するところ、足元に淡く光るエーテル石を投げ込まれる。

理科教員「なっ」

エーテル石の淡い光が急激に勢いを増し、赤白い大閃光が部屋全体を覆う。

理科教員「うおああ！　なんだ！」

物陰から飛び出したチフユ、視界を奪われた理科教員の横をすり抜け、床に置かれていたリュックサックとエーテル石入りの白い袋を手に取り走り去る。

○同・屋上（昼）

理科教員の騒ぐ声。

アキラ「何だ今の」

シユン「また備品泥棒かな、また上手く出し抜かれちゃってるみたい」

アキラ「まあ、誰の仕業か俺は何となく見当
ついでるけど……」

○同・教室（昼下がり）

アキラの在籍する二年E組。

学期最後の授業中。

黒板には「十二月二三日」の文字。

後方の席に座るアキラ、落ち着かない様子。

社会科教員「んで電気の研究が進んでたけどあんまりにもエーテルのエネルギー効率が高かったもんで、立場を食って急激に発展したわけだ」

アキラの左隣から激しく紙とペンが擦れる音。

アキラ、苦い顔を浮かべながら音の先、左隣の席に視線を向ける。

社会科教員「この学校は内地から通ってる人もちよくちよくいるから話しとくか」

アキラの視線の先には大量のテキスト類が積み重なった机、そしてその狭い机で忙しなく内職をするチフユ。
机のフックに掛けられたリュックサツ

クは数センチほどファスナーが開いており、白い袋が少しだけその表面を覗かせている。

社会科教員「この学校がある第一島と住宅街になつて第三島の間、廃工場みたいなだけ建つて無人の第二島があるだろ」

社会科教員、喋りながら黒板に第一島・第二島・第三島・本州の位置関係を簡単な図で描く。

本州から近い順に第一、第二、第三。社会科教員「あそこ実は石炭を使ったエーテル精錬をかなり早いうちからやった場所だな。まあ早々に設備ごと軍に引き抜かれちゃったけど」

作業への集中を一切絶やさないとチフユ。社会科教員「確か一連の事業に宮本の家が関わってた気がするけど、どんな感じなんだっけ、宮本」

教室内の半分ほどの生徒の視線がチフユの席に向けられる。

しかしチフユ、一切気が付いていない。
静まり返った教室の中気づく素振りも
見せないチフユに、困惑する社会科教
員。

アキラ、目の動きだけで周囲を見渡し、
軽くため息をついて左の席へ顔を向け
る。

アキラ「（小声）ねえ、ちょっと」

依然、静寂。

アキラ、一層苦い顔を浮かべ、少し体
を乗り出しチフユの顔の前でヒラヒラ
と手を動かす。

アキラ「（少しだけ苛立って）ねえ」

チフユ、作業を中断して丸くした目を
アキラの方へ向け、その後教室の静け
さに気づく。

アキラ「親族がエーテル精錬技術の初期に関
わってたのかって」

チフユ「ああ……」

チフユ、社会科教員の少し呆れた視線

に気が付く。自身の机の散らかり具合と周囲に交互に目をやり、気まずそうな笑みを浮かべる。

しかしどこか神妙な表情になるチフユ。

チフユ「当時はそうだったみたいです。で

も今は一切関わり無いですね」

社会科教員「あ、あれ、そうなのか、てつきり今もあるのかと。あそこで働ければ出

世街道だな（笑う）」

わずかにチフユの表情が硬くなる。

チフユ「まあ、そうですね」

社会科教員「えーと、で、だ。当然それだけの勢いで技術の中心が変化すれば社会情勢も一気に変わってくるわけで」

アキラ、少し肩を落とし、呆れた様子で腕を組みチフユの方を見る。

視線に気付いたチフユ、目は合わせず

薄ら笑みと共にアキラの方へサムズア

ップ。

それを見たアキラ、ため息。

○同・同（夕）

昔ながらのチャイムの音。

真冬ということもあり既に夕暮れの雰
囲気。

クラスメイトたちも帰路につき始め、
教室内の人影もまばらになっていく。

先ほどのネット記事に再度目を通しな
がらゆっくりと荷物整理を進めるアキ
ラ。

その隣、先ほどと変わらず作業を続け
るチフユ。

教室後方の扉を開いて現れ、アキラの
方へ向かってくるシュン。

シュン「帰ろ」

アキラ、呼びかけられてはじめてシュ
ンの存在に気づく。

アキラ「あごめんさっきの記事にのめりこん
でた、急ぐわ」

シュン「お熱だね」

スマホを机の上に置き、手早く支度を

進めるアキラ。化学のテキストを雑に
机の奥に押し込む。

チフユの方を見てあっけに取られるシ
ユン。

アキラ「よし終わった」

アキラ、シユンの注目する先に気が付
き、苦笑いしつつシユンと目を合わせ
肩をすくめる。

アキラ、シユン、廊下へ向かって歩き
出す。

作業を続けるチフユ。

○同・廊下（夕）

アキラ、教室の後ろ側の扉を閉め、シ
ユンと共に教室を後にする。

数秒間疑問を抑え込むような表情を浮
かべたシユン、我慢できない様子で口
を開く。

シユン「（小声）あ、あれは何？」

アキラ、教室前側、昇降口のある方向

へ向かって廊下を歩き始めながら答える。

アキラ「(小声)彼女ぶっ飛んでるよ、授業中も堂々とあんな感じで、指されてもぜんっぜん気づかなかった」

シュン「あれほど変わった人だとは」

シュン、小走りでアキラを追い抜かし、教室前側扉の窓からゆっくりと教室を覗き込む。

チフユの席には誰もいない。

シュン「え、あ、あれ？」

アキラ「ん、どした？」

アキラも同じ窓を覗き込む。

その時二人の後ろをチフユが早歩きで抜き去る。

二人「!!」

計十冊を優に超える数のテキスト類を両脇に抱え廊下の奥へ消えていくチフユ。

アキラ、シュン、目を見開いたまま顔

を合わせる。

○赤城諸島第一島・商店街（夕）

モダンな街並みの商店街。

街灯に掛かる幕に「エーテル精錬のパ
イオニア赤城諸島 我が国の勝利を称
えよ 終戦百周年記念祭 二〇四五年
元旦より」の文字。

並んで歩くアキラとシュウ。

街の中では、約一週間後に迫る終戦百
年祭に向け組合の人々、そして軍人た
ちが準備を進めている。

アキラ「寒っ」

シュウ「冬至も過ぎていよいよって感じだね」

アキラ「こりゃ夜の散歩とかも嫌になっ
てくるな。ん、何だあれ」

アキラとシュウから少し離れたところ
に、市民の集団とそれに対応する計三
人の軍人たち。

中年女性市民「ですから、取り込んだ民間の

人をもっと丁寧に扱ってくださいと言ってるんです！」

市民の一人が大きな声を上げ、人々の注目が集まる。

市民に対応する軍人三人のうち、ひときわ大柄な男、橋田（56）、顔をきつくしかめたまま沈黙。

軍人A「我々も環境改善に尽力しているので、どうかお引き取りください」

中年女性市民、軍人Aの服を掴んで声を荒げる。

中年女性市民「そう言っというて先月も過労死が出たじゃないのよ！ そんな上辺だけの」

橋田、中年女性市民を突き飛ばす。

アキラ「え」

倒れこむ中年女性市民。

橋田「尽力していると言っています」

アキラ、シュウ、啞然。

その近くでざわつく同級生たち。

男子高校生A「またあの男だ」

市民たち、軍人たちのもとから散って
いく。

アキラ「あいつヤバすぎるって」

シュン「早く行こ」

アキラとシュウ含む高校生たち、早歩
きで商店街を立ち去る。

○同・第一島駅・ホーム（夕）

海岸沿いに位置する駅のホーム。

スマホのカメラを夕日に向け撮影して
いるアキラ。

それを見ながら自身のカバンから参考
書を取り出すシュン。

モダンな雰囲気列車が本州側からや
ってくる。

向かう先は海の上に架かる橋の向こう、
第三島。

○海上列車・車内（夕）

赤城島高校の生徒が乗客の大半を占め

る車内。

シュン「結局、ちゃんとしたカメラは買ってないの？」

アキラ「まあもうじき受験に向けて動かなきゃだからさ」

シュン「全然合間に写真撮る機会ぐらいあると思うけども。挑戦してみれば？」

アキラ「(濁すように) うーん」

窓の外にはぼんやりと目を向けるアキラ。

窓の外には放棄された工場のような施設が残された第二島。

一方シュン、手に持った参考書を読み始める。

さほど人の居ない車両の中で、電車の走る音とまばらな高校生たちの声が響く。

○赤城諸島第三島・第三島駅前(夕)

シュン「じゃあよいお年を」

アキラ「うん、また」

アキラ、シュン、別々の方向へ歩いていく。

○アキラ宅・玄関（夕）

アキラ「ただいまー」

アキラの母「（リビングの方から）おかえり」

○同・自室（夕）

アキラ、カバンを床に置いて上着を椅子に掛け、パソコンを起動する。

デスクトップ壁紙は第一島の海岸から撮影した海上列車の写真。

部屋の目立たない場所には写真撮影のハウツー本。

椅子に座ったアキラ、デスクに置いてあるカメラカタログが目に入るが、少し考え込んだのち、カタログをデスクの端へ追いやりゲームを始める。

○同・リビング（夜）

夕食後。

キッチンのシンクに食器類。

テレビでは有名な洋画が放送中。

アキラ、アキラの母、リビングでくつろいでいる。

アキラの母「あれ冬休みって明日からだっけ？」

アキラ「そー」

アキラの母「課題とかあるの？」

アキラ「少しね。えっと、確か化学でちょっと重ためのやつがあつて。……ん？」

アキラの表情が曇る。

アキラの母「え、何？」

二階の自室までダッシュで消えるアキラ。少ししてから上着を着ながら駆け降りてくる。

アキラ「化学のテキスト学校に忘れたわ！
まだ先生とか学校に残ってるかもしれない
時間だし取ってくる！」

小さい斜めがけの鞆を持って家を飛び

出すアキラ。

○赤城諸島第一島・赤城島高校へ続く坂(夜)

緩い坂を登るアキラ。

数十メートル間隔で並ぶ街灯はエーテルライトを使用しており、淡い赤色の光を放っている。

正門前にたどり着くアキラ。

校舎はどこも明かりが付いていないが、門は開かれている。

アキラ、立ち止まってしばらく思い悩んだのち、高校の敷地内へ入っていく。

○赤城島高校・校舎前(夜)

アキラ、昇降口まで歩いてくるも、校舎に人の気配は無い。扉の鍵も閉まっている。

アキラ「参ったな」

チフユ「何してるの」

アキラの背後に突如現れるチフユ。

アキラ「うあああああ！」

チフユ「出前？　もう先生みんな帰ってるわよ」

アキラ「なわけ！　忘れ物取りに来たけど閉まっていた。　てかさっちこそ、何してんだよ！」

チフユ「(棒読みで) あーまあドライブね」

アキラ「無理があるだろ、てか免許持ってんだ」

チフユ、ヘラヘラと笑って誤魔化すが、ふっと落ち着いた顔になり数秒間考え込んだのち、ニヤリと笑み。

チフユ「キミ、今日の昼のニュースに興味ある感じだったっけ？　だったよね？　ちょっと来て」

チフユ、アキラの腕を掴み強引に引っ張り始める。

アキラ「ちよっと何！　てか力強っ！」

チフユ「協力してもらいたいことがあるの」

アキラ、引きずられながら強い疑いの

目をチフユに向ける。

○同・校庭（夜）

校庭の中央に、ホワイトトリボンタイヤを履いた黒いクラシックカー。

アキラ、チフユに連れられ気が乗らない様子で校庭に入ってくる。

チフユ「キミのスマホ、それなりにいいカメラ付いてるんでしょう？ 私が運転する車の動画、少し離れたところから撮ってくれない？」

アキラとは目を合わせずに車のトランクを漁り始めるチフユ。

アキラ「一切状況が飲み込めないんだけど。てかシュンとの普段の会話、聞いてたのかわよ」

チフユ「まあまあ」

チフユ、トランクから取り出したトランシーバーをアキラに渡す。

アキラ「まあまあじゃないが。ほぼ話した

こともないのに。　で、これは？」

チフユ「自作したトランシーバー。　音質良

いよ」

チフユ、自分用のトランシーバーを手
に持ち、フリフリと揺らして見せる。

チフユ「あ、撮った動画は私に送って。　そ

したらすぐ消してね！」

アキラ「いやあの」

チフユ「いいモノ見せるからさ。　じゃよろ

しくー」

チフユ、車に乗り込む。

アキラ、ため息をつきスマホを取り出
す。

車のエンジンがかかる。

チフユ「(トランシーバー越し)　あー、あー、

オッケー？」

アキラ「オッケー。　いや全然オッケーでは

ないけど」

○同・同・反重力車内（夜）

チフユ「よし」

車内は後付けのスイッチやタンクで埋め尽くされ、後部座席部分には座るスペースもない。

チフユ、一度深く息をつく。

そして口角をつり上げ、ダッシュボードに後付けで設置されたスイッチをオン。

スイッチの上にある高度計が起動。

○同・同（夜）

タイヤのホワイトリボン部分が赤い光を放ち始める。

アキラ「えっ」

目を見開くアキラ。

車体が地面から離れていく。

ホイール面が地面と平行になるようタ

イヤが傾く。

赤い光が勢いを増していく。

アキラのトランシーバーを持つ手が下

がる。

ホバー状態となる車。

数秒間の静止ののち、急加速。

より輝きを増した赤白い光の軌跡を残し、冬の澄んだ夜空に飛び出していく。

○同・同・反重力車内（夜）

高度計の数値がみるみる大きくなっていく。

ギリリと笑うチフユ。

○同・同（夜）

車は校庭から五十メートルほどの高度で上昇をやめ、高度を保ちつつ旋回運動を始める。

天を仰ぐアキラ。

チフユ「（トランシーバー越し）ちゃんと撮れ

たかしら！」

アキラ「え？ あ、ああうん！ そのはず！」

アキラの眼に反射する赤いエーテルの

光。

× × ×

車がゆっくりと垂直降下し着陸。

自慢気な顔を浮かべながら車から出て

くるチフユ。

チフユ「どう？ 反重力車」

アキラ「(興奮して)いや、あ、すご、凄いよ
最高だよ！ ど、どうやってこれを？」

チフユ、一瞬目を丸くし、続けて笑み
をこぼす。

チフユ「んふ、まあ軍との繋がりで、少しばかり協力を、ね。(不満のこもった表情に変わる)まああんなクソな組織、一通り報告が済んだら関係切ってやるつもりだけ
ど」

アキラ「あー今日の授業中の反応はそういう」

チフユ「あ、今のオフレコね？」

少しずつ平静を取り戻すアキラ。

アキラ「このトランシーバーも凄いな、肉声
聞いているみたいだった」

チフユ「なかなかでしょ？」

チフユ、一瞬考えこみ、口角をキュツと上げる。

チフユ「そうだ、忘れ物取りに来たんだったっけ？」

アキラ「え？ まあうん」

チフユ「(楽しげに)せつかくだし他に試してみてほしいものがあるの。アレを使えば忘れ物回収しに行けるかも」

チフユ、トランクから樹脂製のパネル状機械を引っ張り出す。

縦五十、横七十センチ程度のサイズで、底面には三×三の計九個の円形パーツ。両サイドには空洞となっている部分があり、持ち手となっている。

チフユ「はい(機械を渡す)」

アキラ「これは？」

チフユ「反重力プラットフォーム。高所作業用の足場ね」

反重力プラットフォーム(以下、「反重

力PF」に視線を落としていたアキラ、
チフユの方へ勢いよく顔を上げる。

アキラ「え、じゃあこれも」

チフユ「さっきのみたいにホバーするわよ。

姿勢制御装置が付いてるから転落リスクは
無し、側面のボタンで操作するの」

アキラ、目を輝かせる。

アキラ「ま、まじか！（真顔に戻る）えー
と、でも空飛んだところで別に侵入できな
くないか？」

チフユ「あーそれね。理科準備室の窓開い
てるからそこから入って」

顔を曇らせるアキラ。

アキラ「じゃあやっぱり今日の備品泥棒って」

チフユ「あ、予想ついてた？」

アキラ「こいつ……」

○同・校舎前（夜）

校舎外壁の前、化学準備室がある場所
の下まで、反重力PFを持って歩いてく

るアキラ。
それを地面に置いたアキラ、腕を組んで一瞬その場に止まり、校庭の真ん中の方へ目を向ける。
視線の先に、反重力車の開いたトランクのフチに座りメモを書くチフユ。
アキラ、肩をすくめ、反重力PFの上に乗る、側面のボタンに触れてみる。
再び少し間を置いたのち、「上昇」ボタンを叩く。
体が浮き上がる。
強張っていた表情がほぐれ、一転して笑顔になるアキラ。
底面の円形パーツから赤い光を放ちながら、アキラを乗せた反重力PFが校舎の壁沿いを浮き上がっていく。

○同・校庭（夜）

チフユ、運転席に座りホバー関連の部分とはまた異なるスイッチへ、メモ帳

と交互に目を向けている。

アキラ、反重力車のもとへ駆け寄り、
トランクに反重力PFをしまってから運
転席を覗き込む。

チフユ「あ帰ってきた」

アキラ、鞆から化学のテキストを取り
出して見せる。

アキラ「回収できた」

チフユ「お、これでキミも不法侵入者だね」

アキラ「ガチ泥棒には言われたくないね。じ
ゃ帰るから。 ……まあ、エキサイティン
グだったよ」

照れ臭そうに笑うアキラ。

チフユ「ちよっと待って。キミはやっぱり
ロマンを理解していると見たわ。もう少
し撮影に協力してよ」

アキラ、目を丸くする。

アキラ「(まんざらでもない顔)しゃーないな」
助手席の扉を開け車内へ入っていくア
キラ。

チフユ「ていうかさっきの撮影データまだ貰ってないし。持ち逃げ未遂」

○同・同・反重力車内（夜）

助手席に座るアキラ。

アキラ「正直、超乗りたかった」

チフユ、口角をグインと上げる。

チフユ「知ってた」

エンジン始動。

チフユ、アキラの方を向く。

既にシートベルトを締め、スマホカメラを構えているアキラ。

チフユ、満足げに前へ向き直り、飛行機能をオン。

タイヤのホワイトトリボンが赤く光って変形し、車体が地面から離れる。

チフユの丸眼鏡に、エーテルの赤い光が反射する。

チフユ「今度のは、ぶったまげるわよ」

アキラ「え？」

チフユ、ホバー機能とはまた別のスイ
ッチをオン。

エーテルの赤い光の塊が車体前方に生
成され始める。

光の塊はみるみる大きくなる。

言葉を失うアキラ。

光の塊は円状のポータルとなり、その
場に留まる。

車内までもが赤白い光で包まれる。

チフユ「行くわよ！」

アクセルを蹴りつけるチフユ。

エーテルエンジンの重低音が車内に轟
き、ホイールの光も一気に強くなる。

反重力車、赤白い大閃光を帯びたポー
タルへ飛び込む。

ポータルが車の進行方向へ引き伸ばさ
れるように歪む。

反重力車はポータルを突き抜けながら
光を纏って赤みを帯びた半透明となり
消えていく。

校庭が静寂に包まれる。

○西日本某所・沿岸部上空（夜）

豪雨の海上。

赤い半透明の反重力車がフェードインし、空間を歪ませて出現する。

少しずつ赤い光が薄まり、車体が元の見え目に戻る。

○同・反重力車内（夜）

チフユ「よしちゃんと出来た！ あれ、雨は予想外だった」

目を見開いて何度も瞬きするアキラ。

アキラ「今のは!!」

チフユ、ワイパーを作動させ、少しもったいぶってから、ドヤ顔でアキラの方を向く。

チフユ「空間転移！ エーテルが持つ反重力の特性は、つまり空間を歪ませる力。応用すればこんなことも可能なの！」

キヨロキヨロと辺りを見渡し狼狽える

アキラ。

アキラ「で、でもこんな一回たりともニュースで見たことないぞ」

チフユ、鼻を鳴らす。

チフユ「私含め少数人数で開発したからね、私とキミは、初めての人間のテスターってわけ」

昂っていたアキラの顔がスツと冷める。

アキラ「そんな危ない実験に巻き込まれたのかよ、おい」

チフユ「でも本音は？」

アキラ「最高」

チフユ「ハハハ！」

○同・沿岸部地上（夜）

軍用トラックやコンテナが置かれた区域。

レインコートを着た男。

その上空を、赤い光を放ちながら飛行

する反重力車。

レインコートの男「あれは？」

○同・監視塔（夜）

軍服を着た男たちがざわつく。

全員の視線が反重力車へ向けられてい
る。

そのうちの一人がパネルのボタンを叩
き、叫ぶ。

監視塔の男「対空兵器の配備を！」

○同・沿岸部上空（夜）

サイレンが鳴り響く。

付近の施設から対空兵器を積んだ反重
力ドローンが一斉に飛び出し、海の方
へ向かっていく。

サーチライトが点灯し、照らされる反
重力車。

○同・反重力車内（夜）

サーチライトを浴び明るいオレンジの光に包まれる車内。

雨が激しく車体に打ち付けているため、サイレンはほとんどかき消されている。

アキラ「え、何」

あたりを見回すアキラ。

チフユ、窓を開け、上半身を乗り出す。

次第に顔が青く染まっていく。

反重力車が急加速し、体勢を崩すアキラ。

アキラ「おわっ！ 何が起きて」

チフユ「(食い気味で) 逃げるわよ！」

高速度を保ちながら、蛇行気味に操縦するチフユ。

振り回されっぱなしのアキラ。

アキラ「何々！ どうしたんだよ！」

チフユ「ここ、軍事基地のすぐ近く！」

アキラの表情が少しの間硬直し、そして一気に引き攣る。

アキラ「はあああああ!!」

○同・海の上空（夜）

豪雨に加え、付近で雷が鳴り始める。

赤い光の軌跡をうねらせながら高速で飛行する反重力車。

それにピッタリ張り付き続けるサーチライト。

何機もの対空用ドローンが赤い光の軌跡を残しつつ反重力車を追う。

○同・反重力車内（夜）

グユイインという腹の底に響くような激しいエーテルエンジンの駆動音が車体を震わせる。

対空用ドローンが赤い光を放つエーテル弾を反重力車へ発射し始める。

アキラ「実用化前の飛行機械で基地に侵入と

か、軍事攻撃容疑者だ！ 犯罪コレクター

かよ！」

二人の座る席からは、後方から放たれた何発ものエーテル弾が車体を掠め前

方へ飛んでいくのが見える。

チフユ「だから今振り切ろうとしてるのよ！」

アキラ「空間転移は！」

チフユ「この速度で飛びながらポータル生成にまわせるエーテルが無い！」

○同・海の上空（夜）

雷が激しくなってくる。

上下左右に激しく軸をずらす反重力車。

その過程で何度も車体下部が海面に接

触し水飛沫が立つ。

○同・反重力車内（夜）

しばらく顔を引きつらせていたアキラ、

ハッと目を見開き、叫ぶ。

アキラ「素人質問で恐縮なんだけどさ！」

チフユ「何！」

アキラの側のサイドミラーにエーテル

弾が直撃し吹き飛ぶ。

アキラ「上空までかつ飛んでさ！ 落ちなが

らポータルを生成するのってどうなの！」

チフユ、歪ませた顔をアキラの方へ向け、キッと前へ向き直る。

シフトレバーの横に配置された高度調整用レバーが思い切り手前に引かれ、車体が一気に上を向く。

チフユ「成功に私たち二人の人生を賭ける！」

○同・海の上空（夜）

雷がいつそう激しくなる中、急角度で上昇する反重力車。

サーチライトが振り切られるも、追跡を続ける対空用ドローン。

それぞれの光の軌跡が帯となって昇つていく。

○同・反重力車内（夜）

特殊なカーナビで転送先の設定を行うチフユ。

転送先は、赤城諸島上空。

その様子を見ていたアキラ、背もたれに背中を預け、目をつぶる。

目を血走らせているチフユ。

チフユ「じゃあ、行くわよ！」

チフユ、飛行機能のスイッチを思い切り叩き、そして空間転移装置のスイッチを思い切りはね上げる。

飛行用の機構が動作を停止し、キュウウンという空虚な音が車内に響く。

○同・海の上空（夜）

ホワイトトリボンの光が消える。

反重力車はたちまち推進力を失い、車体前部を下にして自由落下に入り始める。

同時に車体前方にエーテルのポータルが生成され始め、その赤い光はどんどん勢いを増す。

○同・監視塔（夜）

海のはるか上空に、大きな赤い光の塊。
軍服を着た男たちが一人残らず立ち尽くしてそれを見る。

監視塔の男「あれは……？」

○同・海の上空（夜）

豪雨と雷鳴の中、反重力車は前方に巨大な光の塊を纏いながら自由落下を続ける。

ついに対空用ドローンとの距離が離れ始める。

○同・反重力車内（夜）

車内が赤色の閃光と男女二人の絶叫で満たされる。

○同・海の上空（夜）

ポータル生成完了が間近となったその時、雷が反重力車へ直撃。
ポータルが紫色に変化。

海面ギリギリで紫色の光を放つポーターが完成し、反重力車が突入。周辺一帯が紫の閃光に包まれ、同じ色の光を纏った半透明の反重力車が海の底へ消えていく。雨が海面に打ち付ける音。

○赤城諸島第一島・上空（夜）

何もない上空から、ガラスを突き破ったように紫色の破片を飛び散らせながら反重力車が現れる。不気味に光る紫色の穴が海水を吐き出し、次第に消滅する。

○同・反重力車内（夜）

チフユ「うそ、できた！」

チフユ、飛行機能を起動させ、車の体勢をなんとか立て直す。

チフユ「ふう……」

チフユ、助手席へ目をやる。

ぐったりとノビているアキラ。

○同・赤城島高校へ続く坂の麓（夜）

反重力車が走って坂を下ってくる。

街灯はエーテル灯ではなくガス灯。

坂を下りた先は二本の道に分かれている。

分かれ道の前で停車し、アキラがよろよろと出てくる。

チフユ「じゃ、じゃあ、よいお年を」

アキラ「（ふらつきながら）うん、た、楽しかったよ」

アキラ、反重力車の扉を閉める。

反重力車、アキラが使う方とは別の方の道へ去っていく。

アキラ、大きなため息。

アキラ「（小声）とんでもない体験だった」

○同・商店街（夜）

ほぼ真っ直ぐ歩けるようにはなったも

のの、まだ少しぐったりしているアキラ。

組合の人々や軍人たちは既に引き上げており静寂に包まれている商店街。

ここも街灯はガス灯となっており、周辺の建物では沢山の煙突から湯気や煙が上がっている。

スチームが吐き出されるようなシュウウという音も聞こえてくる。

それらには気付かずぼんやり歩くアキラ。

時折通り過ぎる車も、スチームを吐き出したり黒煙を上げている。

アキラ、ある程度街を進んだところで思い出す。

アキラ「あ、そうだ動画、また実験の動画送るの忘れてた。ん、あれ？」

スマホには「圏外」の表示。

アキラ、顔を上げる。

アキラ「あれ……？」

普段見ているものとは異なる街並みに
気づくアキラ。改めて圏外表示を確認
し、辺りを見回しながら歩き出す。
街灯に掛けられている幕には「蒸気機
関産業の革命児赤城諸島 我が国の勝
利を称えよ 終戦百周年記念祭 二〇
四五年元旦より」の文字。
アキラの表情が曇っていく。
遠方、海上列車の駅の方から蒸気機関
車らしき汽笛。

アキラ、それを聞き駅の方へ走り出す。

○同・第一島駅前（夜）

走って駅前までやってくるアキラ。

アキラ、臭いを嗅いで渋い顔を浮かべ、

線路際へ歩いていく。

スチームが吐き出される音。

闇夜の中に真っ黒な煙がホームから立
ち上っている。

アキラ、駅舎外からゆっくりとホーム

を覗き込む。

停車しているのは蒸気機関車。

アキラ、立ち尽くす。

アキラ「どうなってる」

と、見覚えのある黒いクラシックカー
がやってきて、アキラの近くで停車。

運転席から手招きするチフユ。

アキラ、駆け寄り、助手席側の扉を開
ける。

アキラ「なんかおかしくないか」

チフユ「とりあえず乗って」

○赤城島大橋・全景（夜）

海上列車の路線脇に通る道路を、反重

力車が第三島の方へ走っていく。

その横を追い抜いていく蒸気機関車。

○同・反重力車内（夜）

アキラ「自分がもう一人？」

蒸気機関車の方を見ていたアキラ、チ

フユの方へ向きなおる。

チフユ「そう。間違いなく家にもう一人の私が出た。危うく鉢合わせるところだったの」

アキラ「だから俺にも確認してくれってことか。あ、そういえば動画送ろうとしたんだけど」

チフユ「圏外になってるのよね」

アキラ「そっちもか。何が起きてるんだほんとは。空間転移で二人仲良く脳みそがペースト状にでもなっちゃったのか？」

○赤城諸島第三島・アキラ宅前（夜）

ここでも蒸気機関の技術が多く見られる。

アキラ宅前に反重力車が停車。

アキラ、車から出てトランクを開け、

反重力PFを取り出す。

アキラ、学校での初使用と同じ要領で浮かび上がり、二階自室の窓から中を

覗き込もうと試みる。

自室のカーテンに少し隙間があり、そこから中を覗いてみるアキラ。

室内は淡い光のガス灯が灯っている。

ベッドの方に視線を向けるアキラ。

アキラ「うわ」

視線の先にはぬいぐるみを抱いて眠る、もう一人のアキラ。

○同・反重力車内（夜）

トランクを占める衝撃が車内に伝わる。

助手席へ戻ってくるアキラ。

チフユ「どうだった？」

アキラ「まあ、いたよ」

悶々とした表情を浮かべるアキラ。

チフユ「そっか……。今の状況についていろいろ考えてたの。とりあえずゆっくり

話すために、この辺で人が居ないところな

い？」

アキラ「（心ここにあらずという様子）あー、

ちよつとかかるけど無人の第二島とか」

チフユ「それだ、行きましょ」

チフユ、淡々と車を動かし始める。

アキラ「（独り言）俺も無意識にあんな感じで寝てんのかな……」

○赤城諸島第二島・駐車場（夜）

廃工場風の施設が残されている無人の第二島。

その駐車場は樹木や建設物に囲まれ、外からも見えにくくなっている。

そこに、反重力車がライトを消した状態で入ってくる。

○同・廃工場内（夜）

月の光にぼんやり照らされた、放棄された工場内部。

扉が揺すられ、外から扉越しに声。

アキラ「ダメだ閉まってる」

チフユ「少し下がってて」

エーテルを収束させたレーザーの刃が
外側から扉を貫き、鍵を破壊する。

扉を開き、中を覗き込むチフユ。

チフユ「これでオツケー」

アキラ「あなたの『オツケー』はさっきから
どこかしらオツケーじゃないな」

× × ×

巨大な機械が置かれているものの、そ
の判別ができないほど暗い室内。

穏やかではない表情のチフユ、施設の
端にある机の上に車から持ってきたエ
ーテルランタンを置き、明かりをつけ
る。

そこに二人分の椅子を運んでくるアキ
ラ。

アキラ「で、だ。（椅子に座る）今の状況
が一切飲み込めないんだけど。なんで俺
がもう一人？」

椅子に座るチフユ。表情は重い。

チフユ「今から言うことは一応まだ推測の域

を出てないんだけど」

同様に表情が重くなるアキラ。

チフユ「真剣に聞いてね。ここは……、い

わゆる並行世界なんじゃないか、って」

アキラ「並行世界？　って、パラレルワールドってやつ？」

チフユ「そう。私たちが暮らしてた世界と全く同じ時間が流れる別の世界。今ここは二〇四四年の十二月二三日だし、十七歳の宮本チフユと、えーと、あー（アキラの方を気まずそうに見て、目を逸らす）」

アキラ「（呆れ気味に）遠山アキラね」

チフユ「遠山君も普通にこの世界で生活してるみたい」

アキラ「えーと、じゃあ街だとかの景色が変なの？」

チフユ、腕を組み少しうつむく。

チフユ「この世界はどういうわけか、エーテルの技術が見られない。エーテル石自体が存在しなかったりするのかもしれない。

その一点が巡り巡って主要技術の違い、ひいては風景の違いを生んでる」

アキラ「じゃあ別に世界がおかしくなったわけじゃなくて」

チフユ「私たちが別世界からの来客っていうイレギュラー。この世界の人たちは、当たり前前の日常を当たり前前に送っているだけ」

机に肘をつき、その手で顔を覆うチフユ。

アキラ「でもそんな機能あの車に搭載されてたわけじゃ……」

手で顔を覆ったまま、首を横に振るチフユ。

チフユ「もちろんそんなものは無い。ただ

唯一心当たりがあるとすれば、あの時、さつき転送した先で雷が落ちていたことね」

アキラ「何か関係が？」

チフユ「転送ポータルの開発をしていた時、電気を流したポータルに小さい物体が触れた際、転送が起こらずに消滅させてしまう

ことを確認していたの」

アキラ、椅子から立ち上がる。

アキラ「じゃあ今回のつて！」

チフユ「エーテルポータルに膨大な電気が注がれて、私たちが車ごと消滅させる、いや別世界へ送り込むポータルが発生してしまったってことになるわね……」

アキラ「そんな。（弱々しい笑み）ま、まあ最悪ここで暮らせば、さ」

チフユ「残念だけど駄目ね。自分ともう一人の自分が同じ個人情報を使ってそれぞれ生活することになるのよ」

アキラ「怪しまれないわけないか」
机に突っ伏してうなだれるアキラ。

アキラ「（顔を上げる）帰る手立ては？」

力無く首を横に振るチフユ。

チフユ「電気が入手できない。蒸気機関使ってる世界よ、私たちの世界でも電気は切り捨てられた技術だし」

アキラ、再び机に突っ伏す。

ランタンの光がチリチリと揺れる。

沈黙。

チフユ「ごめん。ごめんね。君のこと巻

き込んだじゃった」

引き攣った弱々しい笑みを浮かべるチ

フユ。

再び沈黙。

顔を少し起こすアキラ。チフユとは目を合わせることもできない。

アキラ「とりあえず、今日はもう寝よう」

チフユ「うん」

○同・駐車場・反重力車内（朝）

曇り空を通した鈍い日光が車内に差し込む。

チフユ「起きて！ 遠山君起きて！」

助手席で寝ていたアキラ、助手席側の

扉を開かれチフユに揺すり起こされる。

アキラ「（虚ろな目で）ああ、知らない天井だ」

チフユ「ほら早く！」

アキラの腕を思い切り引っ張るチフユ。
その眼の下にはクマを浮かべている。

アキラ「おあああっ！」

車から引きずり降ろされ何とか着地するアキラ。

チフユ「こつち！」

明るい表情のチフユを見て、困惑するアキラ。

○同・廃工場前（朝）

入り口の扉は開け放たれている。

チフユに引っ張られてくるアキラ。

アキラ「もう、何だよ！」

チフユ「いいからいいから！」

心躍らせる子供のような顔を浮かべるチフユ、アキラを中に引き込み勢いよく扉を閉める。

扉には、「赤城第二島火力発電試験場」の文字。

○同・廃「試験場」内（朝）

昨晚とは異なり、日光によりある程度の明るさがある廃試験場（廃工場）内の設置された巨大な装置類まではつきりと見える。

目を輝かせアキラの方を向くチフユ。

チフユ「朗報よ！ これ、発電施設らしいの！」

アキラ「（あくび）えーと、つまり……」

チフユ「私たちが知ってるここは、石炭を使ったエーテル精錬施設だったでしょ！ うちの世界では石炭での火力発電の試作がされてた場所みたいなの！ その機械も発電装置！」

ぼんやりした顔から一気に目を見開く

アキラ。

アキラ「……ってことは！」

アキラ・チフユ「帰れるかも！」

× × ×

昨晚と同じ場所に座るアキラ。

机の上にはファストフード店のバーガ

ーやポテトなどが置かれている。

チフユの方にはオニオンリングやチキンナゲットも置かれている。

そこにキャスター付きのホワイトボードを引いてやってくるチフユ。

アキラ「やっぱ朝からバーガーポテトはしんどいって」

チフユ「文句言わない。とにかく今は安価にカロリー摂らなきゃなの！ さ、始めるわよ！」

チフユ、ボードに勢いよく「作戦会議！」と書き込む。

チフユ「まず状況整理。私たちはエーテルの空間転移ポータルに落雷を受け、蒸気機関が栄えている並行世界に迷い込んでしまった」

アキラ「(苦笑い) いまだに信じられないな」
チフユ「私たちにとってもこの世界においても電気はメジャーではないエネルギーだけれど、驚くことにここは発電施設の放棄さ

れた試験場だった！」

アキラ「すごい奇跡だな」

チフユ「昨晚、君が寝た後に転送装置のログを確認してたら、本来想定される出力と実際のログに違いがあったの！ その差分から帰還に必要な電力を導き出してやれば！」

アキラ「おお……？ で、できんの？」

チフユ「り、理論上は……」

チフユ、バーガーを頬張る。

チフユ「(飲み込む)とにかく！ 昨日も言っ
たようにここで長期的に生活するなんてこ
とはできないから、やってみるしかないの」

アキラ、少し黙り込んだ後、吹っ切れ
た顔。

アキラ「じゃあ頑張ってみるか！」

チフユ「よっ！ とは言いたいところなんだ
けど、その、一つ大問題が」

少し真剣な面持ちになるチフユ。

アキラ「え？」

チフユ「昨晚頭をこねくり回して考えて辿り

着いた理論なんだけど。結論として。この世界では絶対にトラブルを起こさないこと」

アキラ「ん？ まあ個人情報でも聞かれたらマズいか」

真剣な面持ちになるチフユ。

チフユ「そうだけどそうじゃない。多元宇宙の考えはわかる？」

アキラ「今体感してるみたいに、複数の世界が並行に存在してるみたいなのやつだっけ」
チフユ「そう。えーと（あたりを見回す）、あ、そうだ」

チフユ、ポテトの入った箱を手に取り、その中から少し先端が焦げ付いた一本を少し上に引っ張り上げる。

チフユ「これが私たちが暮らしてた世界、今後はA世界と呼びましょう。で、周りにある他のポテトが、並行して存在する別の世界と考えて！」

アキラ「なるほど？」

もう一本、先が少し焦げたポテトを引
つ張り上げるチフユ。

チフユ「それで、これが今いる蒸気機関の世
界。こっちはB世界としましょう」

（「A世界」「B世界」は今後もそれぞれ
の世界を表す語として使用）

アキラ「うん」

チフユ「今回私たちは、これらの世界を繋ぐ
ポータルを通り抜けてしまった。エーテ
ルと電気力をぶつけてトンネルを開通さ
せたと考えるとわかりやすいかな。その
トンネルと同じ長さのものを、装置のログ
から導き出して再現するっていうのが今回
の作戦になるわね」

アキラ「おー。で問題ってのは？」

チフユ「この世界にとって部外者である私た
ちが起こす行動は、言わばすべてが想定外
の出来事なの。それによって巡り巡って
未来を変えてしまうようなことをしてしま
うと……」

チフユ、アキラのポテトの箱から一本
ポテトを引き抜き、B世界を示すポテ
トの横に差し込む。

チフユ「想定外の未来の変化は、また別の新
たな並行世界の発生を招いてしまう。こ
れで言うとB世界のポテトが枝分かれする
イメージね。すると？」

アキラ「……新しい並行世界に押し出されて、
並行世界同士の位置関係が変わる！」

チフユ「そう！　それで、位置関係が変わる
ということは双方を繋げるために必要なト
ンネルの長さが変わってしまうというこ
と！」

アキラ「俺たちが再現できるのはここに来る
ときに通ってきたのと同じ長さのポータル
だけだから、そうなたらおしまいか」

チフユ「だからくれぐれも気を付けましょう。
トラブルを起こさないように。　もう一人
の自分と鉢合わせるのを他の人に見られな
いように。　そして、この世界に存在しな

いエーテルの技術を、特に軍の人間には知
られないように……！」

机に身を乗り出し忠告するチフユ。

アキラ「顔近っ」

○赤城諸島第一島・第一島駅前通り（昼）

第一島駅に蒸気機関車が停車している。

街の方へ向かって歩くアキラとチフユ。

アキラ、昨晚A世界の家から持ってきた

た斜めがけの鞆を身に着けている。

アキラ「（蒸気機関車の方を振り返って）かつ

こいいな……」

チフユ「そんなこと言ってる場合じゃないけ

ど、やっぱり立派なものね。ただ急がな

きゃ。イレギュラーが起きてるのはこの

世界だけじゃないのよ？ 私たちが居なく

なった世界、今はどうなってることやら」

アキラ「警察沙汰、ぐらいにはなってるかも

なのか」

チフユ「とにかく、できることを迅速にやり

ましよ。私は図書館、遠山君は広く街中で使えそうなものや情報が無いか調査。連絡はトランシーバーでね」

アキラ「了解」

チフユ、アキラとは別の道に進んでいく。

アキラ、深く息をついたのち、頬を叩き街へ走り出す。

○同・商店街（昼）

街並みには大きな歯車の付いた機械や沢山の煙突が見られ、武骨でレトロな雰囲気。日が昇ったため、昨晚よりもA世界との違いが際立つ。

街全体がスチームの排出音で包まれ、道路には蒸気自動車。

組合の人々や橋田含む軍人たちが祭りのための準備をしている。

アキラ「おお……」

あたりを見回し、鼻を鳴らすアキラ。

アキラ「よし、やってやるか」

○同・コンビニ駐車場（昼下がり）

影が伸びてきた時刻。

コンビニのドアを開け放ち、ホットスナック片手にゲツソリした顔で出てくるアキラ。

アキラ「……だめだ」

人目につかないコンビニの裏に移動し、トランシーバー越しにチフユと話しながらホットスナックを食らうアキラ。

アキラ「マジで何も見つからない。本屋もホームセンターも見て回ったけど、どこも蒸気機関のことばっかで発電のことなんてどこにも書いてやしない」

チフユ「残念だけどこっちも。蒸気機関の知見が深まっただけね。でもこれが結構面白くて。温故知新みたいなの？」

アキラ「ちょっとハマってんじゃねーか。ともあれもう少し粘ってみるよ」

チフユ「了解。こっちも頑張るね」

うなだれるアキラ。

アキラ「どうにか取っ掛かりの一つでも見つ

けられれば……」

渋い顔をしつつ、ホットスナックのゴミをゴミ箱へ入れてその場を去るアキラ。

そのゴミ箱の中に新聞。

「発電技術、実用化の目途立たず 軍の技術独占に高まる不満 二〇四四年十二月二三日（冒頭のネット記事に似た記事構成）」

一度その場を去ってから立ち止まり、戻ってゴミ箱へ飛びつくアキラ。

アキラ「（トランシーバーを取り出す）取っ掛かり見つけたわ」

チフユ「（トランシーバー越し）え？」

○同・路地裏（昼下がり）

人の居ない路地裏で新聞を開いている

アキラ。トランシーバー越しにチフユ
と会話中。

チフユ「(不満げに)なるほど。こっちでも
軍は民間の人間を引き抜いてこき使ってる
わけね」

アキラ「この辺も並行世界か。軍が悪事を
はたらいてない世界線はあるのかね。つ
て、協力者に宮本の名前書いてある」

チフユ「ますます不機嫌な声色)最悪。こ
っちでは大々的に手を貸しちゃってるのね。
まあ、今の私たちからするとその情報は地
獄に垂らされた救いの糸だけど」

アキラ「こっちの宮本にどうにか情報を横流
ししてもらうのか」

チフユ「私が接触するのは危険だから、遠山
君に動いてもらうことになりそうだけどね」

アキラ「うへ、まあそうか」

チフユ「私の駒として頑張ってもらっちゃお
っかなー」

アキラ「これが二人に増えるのか」

チフユ「聞こえてますよ」

○ B世界のチフユ宅前（夕）

第一島の外れにある、和風の大きな邸宅。

アキラ、トランシーバー越しにチフユと会話しながらやってくる。

アキラ「よし着いた」

チフユ「オッケー。じゃ向かって右にある小さい平屋の建物をノックしてみてください。私

と同じなら、この時間は作業してるはず。

あ、大きい方の家は入らないで。中に家政婦さんがいるから」

アキラ「デカイ家、敷地内に建物複数、おまけに家政婦？ ホントにお嬢様なんだな」

チフユ「んー、まあね」

チフユの作業部屋である平屋の前まで歩いてきたアキラ。気の乗らない表情を浮かべたのち、意を決してノック。扉が開く。チェーンのロックはかけら

れたまま。

B 世界に暮らすチフユ（以下、「Bチフユ」）、顔を覗かせる。

Bチフユ「…君は同じクラスの」

アキラ「遠山アキラ。ただ少しばかり変わった事情があつて、入れてくれないかな」

Bチフユ、警戒の眼差し。

アキラ「えーっと、本当に何と言ったらいいか。俺、もう一人のキミと一緒に、この世界にやってきた別世界の遠山アキラなんだ。…それで」

Bチフユ「ごめんなさい」

扉がびしゃりと閉ざされ、鍵の閉まる音。

アキラ、肩を落としてトランシーバーを取り出す。

アキラ「どうしよう、この状況信じてくれるわけないってやっぱ」

チフユ（トランシーバー越し）スマホで昨晚の反重力車の実験録画を再生して、それを

扉の郵便配達口から入れて。 私なら絶対

食いつく！」

アキラ「いやそれ最悪スマホ帰ってこなくなるんだけど。 まあやってみるか……」

アキラ、渋々チフユに言われたとおりにする。

扉の向こうでパタリとスマホが床に落ちる音。

アキラ「……」

鍵とロックが外れる音が聞こえ、勢いよく扉が開く。

Bチフユ「ね、ねえ、これって！」

目を輝かせ出てくるBチフユ。大きい丸眼鏡は同様だが服装はA世界のチフユとは異なり、髪も短め。

その手には液晶ガラスがバキバキに割れたスマホ。

アキラ「あああああーッ!!」

○ Bチフユの作業部屋（夕）

歯車、小型ボイラー、他にも未知の機械など、沢山の物で満たされたBチフユの部屋。

Bチフユ「な、なるほどねえ」

アキラ「だから可能な限り迅速かつこの世界の未来に干渉しないように、発電装置の補修パーツ、マニュアル、燃料あたりを調達したい」

Bチフユ「相当な無理難題ね。軍事基地に潜入することになるのよ？ キミ単独で」

アキラ「え？ なんで。宮本は施設に出入りできるんじゃないの？」

Bチフユ「私は今限りで辞めることになってるの。そんな人間が非番の日に研究室とか資料室でコソコソしてたらどんな疑いをかけられるか。相手は軍、それに上司なのよ」

アキラ「俺は見つかっても不審者止まりだけで、宮本は逆逆者で確定になるか」

Bチフユ「そう、そっちの私の理論が正しい

なら、ブツは手に入ってもキミたちは帰れなくなる。私にできるのはそれとなくサポートすることぐらい。それに」

アキラ「何」

Bチフユ「キミたちを助けるのは楽しそうだとは思うんだけど、報酬が無いのはね」

アキラ「ああ、まあもつともか」

アキラ、腕を組み下を向く。

アキラ「うーん。あ」

持ってきている鞆に手を突っ込むアキラ。

Bチフユ「え！ なになに、もしかして貨幣価値が違って、君にとってのお小遣いで私が家を買えちゃうとか！」

アキラ「いやコンビニとか使ったけどほぼ同じだった」

Bチフユ「えー（むくれる）」

アキラ「代わりにほら、これ。興味無い？」

アキラの手には化学のテキスト。

Bチフユ「なに？ これ」

アキラ「さっきスマホ……、その板で見せたやつ、それエーテルってエネルギーの技術なんだけど、それについても書いてある本。

高校生用だから初学者向けだと思う」

Bチフユ「目を輝かせる」読みたいかも、かなり！」

アキラ「じゃあこれでいっちょどう？」

Bチフユ、テキストを受け取り、パラパラと流し読みする。口角が上がっていく。

Bチフユ「乗った！」

アキラ「よし！」

Bチフユ「って、普通にエーテルのこと見ちゃったけど大丈夫かな」

アキラ「あ」

Bチフユ「あつても大丈夫か。だってエーテルのことを知っただけなら、未来が変わるわけではないじゃない」

アキラ「確かに。未来は行動の結果によって初めて変わる」

Bチフユ「うん、ひとまず軍に横流しとかしなければセーフ！　じゃあ……（時計を見る）、九〇分後に軍事基地最寄りの駅前集合でどう？　あ、伝わる？」

アキラ「位置はわかる。でも急ぎすぎじゃ？」

Bチフユ、ずいとアキラの方へ近づく。

Bチフユ「なるべく早くことを済ませないといけないでしょ？　土曜夜はちょうどいい機会よ。偽の入場証なんでもたもた作っていられないし、好機は見逃しちゃダメ」

アキラ「……まあ確かに」

Bチフユ「じゃあよろしく！　具体的な作戦は到着したら伝えるからまた後で、私はこれを読むので忙しいの」

アキラから受け取った化学テキスト片手に、Bチフユ、アキラを玄関へ無理矢理押していく。

アキラ「おあ、ちよっと！」

Bチフユ「じゃ九〇分後に！」

家から追い出されるアキラ。扉が勢い

よく閉まる。

アキラ「やっぱどの世界線でもこんななの
かよ」

○第一島―本州間・全景（夜）

海上の橋を本州側へ走っていく蒸気機
関車。

本州沿岸部に軍事施設。

○軍事基地最寄り駅前（夜）

蒸気機関車が駅のホームに停車。
駅舎から出てくるアキラ。斜めがけ鞆
を身に着け、風呂敷に包んだ反重力プ
ラットフォームを持ってきている。
数百メートル先に大きな軍事基地。ひ
ときわ大きな中央棟が目立つ。
アキラ、Bチフユと合流。

Bチフユ「なに？ それ」

アキラ「高所作業用の、ホバーする足場？ み
たいなやつ。潜入に使えるかと」

Bチフユ「そんなのあるの？　もっと先に言
ってよ」

アキラ「そっちがさっき追い出したんだろ」

Bチフユ「あ、あははー」

近くの駐車場には、反重力車に使われ
ている物と同じ車種の黒いクラシック
カー。

Bチフユ「じゃあこれ、敷地内の大まかな地

図と、遠山君が忍び込む研究施設の地図ね

（二枚の折りたたまれた紙を渡す）

アキラ「分かった」

Bチフユ「遠山君は船の発着場から研究施設
を目指して。私は普通に正面口から入っ
て、研究施設の搬入口を少しの間開けとく
から」

アキラ「了解。スマホで写真撮るからすぐ
終わるよ」

Bチフユ「あの板にカメラまで入ってるの!!」

アキラ「流石にこれは渡せないぞ（地図を確
認し始める）」

B チフユ「わ、わかつてる。 ……でも今度

少し触らせてもらえると嬉しいナ」

アキラ「まあ情報漏らさないなら」

B チフユ「やった！」

○ 軍事基地・発着場外壁沿い（夜）

反重力プラットフォームを手に持ちや
ってくるアキラ。目より下を黒いスカ
ーフで覆っている。

アキラ「最悪のサントさんか」

周囲からの視線が通らない場所である
ことを確認し、反重力プラットフォーム
を地面に置き起動する。アキラを乗
せて外壁沿いを上昇する反重力プラッ
トフォーム。

○ 同・発着場（夜）

人の気配はほとんど無い発着場。

壁の外側から様子を窺ったのち、壁を
乗り越え敷地内に降り立つアキラ。

付近のコンテナの裏に隠れて周囲を見回したのち、研究施設の方へ駆けていく。

○同・研究施設・搬入室（夜）

簡素な内装の研究施設。

薄暗い廊下と明かりの点いていない搬入室。

キーを持ち、周囲を警戒しながら小走りで入ってくるBチフユ。

Bチフユ「バレないといいけど」

操作パネルにキーを差し込む。

○同・研究施設搬入口前（夜）

物陰に隠れて待つアキラ。

搬入口が開き出てくるBチフユ。

駆け寄るアキラ。

Bチフユ「気を付けて。資料室は実験室を経由して入れる」

○同・研究施設・実験室（夜）

複数の機械が大きな音を立てて動作している。

作業服を着た二人の男が作業中。

扉を少しだけ開き、実験室に忍び込む

アキラ。

機械の動作音で気付いていない作業員たち。

アキラ、物陰を経由しつつ、隣接した

資料室へと滑り込む。

○同・同・資料室（夜）

肩の力が抜け、大きく息を吐くアキラ。

周囲にはたくさんの書物。

アキラ「やるか……」

反重力プラットフォームを床に置き、

作業に取り掛かるアキラ。

× × ×

アキラ「（書物を取り出して）これか！」

書物を机に広げ、写真をスマホで撮っ

ていくアキラ。

○同・同・実験室（夜）

作業服員 A 「よし終わった」

作業服員 B 「こつちもちょうどです」

機械のスイッチを切っていく二人。

○同・研究施設搬入口前（夜）

物陰で施設の様子を見守る B チフユ。

実験室の明かりがふつと消える。

B チフユ 「え」

○同・実験施設・資料室（夜）

アキラ 「（資料を棚に戻す）これでよし」

実験室から漏れてきていた光が消え、

真っ暗になる。

アキラ 「え」

○同・同・実験室（夜）

作業服員二人が実験室を施錠し去って

いく。

明かりの点いていない実験室。

慎重に資料室から出てくるアキラ。

人の気配が無くなったことに気付き、

慌てて入り口のドアへ駆け寄る。

ドアの窓から廊下側を見るアキラ。

廊下を歩き消えていく作業服の軍人二人。

ドアの鍵を開けるアキラ。

しかしドアが開かない。

アキラ「冷や汗を浮かべる」閉じ込められる

「サントさんがいるかっての」

ドアの廊下側の取っ手に南京錠。

部屋の中を見回すアキラ、非常ベルの存在に気付く。

○同・同・全景

ベルのけたたましい警報音。

○同・研究施設搬入口前（夜）

Bチフユ「な、なにやってるの……！ 私、

下手に手出せないわよ……！」

○同・同・実験室（夜）

作業服員二人が走って戻ってくる。

中の様子を窺いながら南京錠とドアの鍵を開け、中に入ってくる二人。

アキラ、その背後をすり抜け、搬入口へ向かう。

○同・同・廊下（夜）

激しく動揺しながら走り抜けるアキラ。

搬入口までもう少し。

搬入室の方から声。

軍人A「搬入口が開いてるぞ！ 何事だ！」

袋小路となったアキラ、すぐ近くにある備品保管室へ駆けこむ。

搬入室から廊下へ出てくる軍人A。

備品保管室から物音。

軍人A、備品保管室のドアを開け中を

確認。

人影は無い。

実験室の方へ去っていく軍人A。

反重力PFで天井に張り付いていたアキラ、床に降り搬入室へ向かう。

○同・同・搬入室（夜）

搬入口は開かれている。

アキラ「（走りながら）よしよしよしよし！」

○同・研究施設搬入口前（夜）

低めの体勢で搬入口から顔を出し様子を窺うアキラ。

覗かせた顔のすぐ前に手持ちランタン。

顔を上げると駆けつけてきた三人の軍

人。中には大男橋田も。

アキラ、息を詰まらせる。

軍人B「子供……？」

双方沈黙が続く。

アキラ「あー、っと」

アキラ、踵を返して走り出す。

軍人 B 「おい、待て！」

それを追う軍人三人。

○同・蒸気機関装置区画（夜）

研究施設の横にある屋外区画。

蒸気や沢山のパイプ、重厚な装置群に
囲まれた場所へ駆けこんでくるアキラ。

ランタンを携えそれを追う軍人三人。

軍人 B 「止まれ！」

アキラ「（独り言、小声）こっちとしては止ま
っても終わりなんだよ！」

大きな装置を取り囲むように設置され
た足場の階段を駆け上がっていくアキ
ラ。

軍人三人、走りながらリボルバーを抜
き発砲。

足場の上を走るアキラのもとへ弾丸が
飛ぶ。

アキラ「マジかよっ！」

アキラ、地上十メートルほどの高さまで足場を登ってきたところで、施設の敷地外、外壁のすぐ外側にある道路を大型トラックが走ってきていることに気付く。

迫る軍人たち。

アキラ、反重力PFを起動させてその両サイドにある持ち手をそれぞれの手で握り、頭の上で掲げるようにして道路へ向けて跳び下りる。

重力を相殺しライダーの要領でトラックのコンテナへ向けて滑空するアキラ。

そこへ足場を登りかけていた橋田が飛び掛かる。

アキラ「うおっ!!」

反重力PFから警告音が鳴り、体勢を崩してコンテナへ落ちていく二人。

○軍事施設脇の道路・トラックコンテナ上(夜)

コンテナの上に墜落するアキラと橋田。
一足早く体勢を立て直した橋田、アキラへ掴みかかる。

反重力PFを前に構え少しでも抵抗するアキラ。じりじりと後退。

車体の揺れによって橋田の体勢が崩れる。

姿勢が低くなっていたアキラ、少し早く体勢を持ち直す。

トラックの後方遠くから軍の車が数台追ってくる。

カーブに差し掛かる。

車が振られてアキラのみが転倒し車体から滑り落ちる。

アキラ「ぐっ！」

右手で反重力PFを保持しているため左手のみでコンテナのフチに掴まるアキラ。

迫る橋田。

アキラ「クソっ」

アキラ、反重力PFの底面パーツが目
に留まる。

アキラ「思い通り動いてくれよ……！」

姿勢を落としアキラの方へ腕を伸ばす

橋田。

アキラ、右腕を下ろしたまま、反重力
PFを底面がコンテナ側面に沿うように
して起動。

コンテナ側面に反発して推進力を得た
反重力PFがアキラの右肩を軸に跳ね上
がり、橋田の顔面へ迫る。

橋田「なっ」

反応できずに反重力PFを顔面に喰らつ
た橋田、反対側のフチから草地の地面
に転落。

それを見届け、息を切らしながら何と
かコンテナの上に乗るアキラ。

○軍事基地最寄り駅近くの路地（夜）

逃げたアキラを探し、軍事施設の外に

はまばらに軍人が出てきている。

しきりに辺りを見回しながら通りを歩

くBチフユ。

路地に隠れていたアキラ、近くを通っ

たチフユに呼びかける。

アキラ「(小声) 宮本！ こっち」

Bチフユ「(駆け寄る) 遠山君！ 大丈夫だっ

たの!!」

アキラの両肩に手を乗せ安堵するBチ

フユ。

アキラ「ボヤ騒ぎにはなっちゃったけどなん

とか。 顔も身元もバレてない」

全身の力が抜けるBチフユ。

Bチフユ「ああ良かった……！ 銃声が聞こ

えたときは死んじゃったかと！」

目を丸くし、照れ臭そうに笑うアキラ。

Bチフユ「私がリスクを背負うべきだった、

こんなに危ない目に合わせるなんて」

互いに沈黙。

意を決したように顔を上げるアキラ。

アキラ「……いや」

Bチフユ「え？」

アキラ「俺が行くのが最善だったよ。チフ

ユの助けが無ければこう上手くはできなかつた、ありがとう」

きよとんとするBチフユ。

Bチフユ「くしゃりとした笑み」助けになつたならよかつた。通りは危なそうだから、車持ってくるね」

アキラに背を向け走っていくBチフユ、穏やかな笑顔。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

扉を開け入ってくるアキラ。

チフユ、目を見開き振り向く。

チフユ「どうだった!!」

アキラ、誇らしげにサムズアップ。

チフユ「おお！（目を輝かせる）」

× × ×

作戦会議に使った机と椅子にて、コン

ビニ弁当を食べながらアキラが持って
帰った写真を確認する二人。

チフユ「必要な情報は揃ったわね！　グッジ

ヨブ」

アキラ「良かった。　つと、いたた」

チフユ「え、もしかして怪我……？」

チフユの表情が少し暗くなる。

アキラ「あー、まあちよつとボヤ騒ぎがあつ
て。　まあちよつとぶついたりしただけだ

から、大丈夫。」

チフユ、うつむく。

チフユ「ご、ごめんね。　やっぱこんなのに

巻き込んだせいで」

アキラ「大丈夫だって、もうそういうのは無
し。　チフユにしかできない作業がある分、

その他は引き受けるから」

目を丸くするチフユ。

アキラ「よろしく頼むよ」

チフユ、ギリリと笑う。

チフユ「任せて」

○軍事基地・廃材置き場（昼）

先日スマホに収めた資料を確認しつつ、
発電装置の補修に必要なパーツをクラ
シックカーに積んでいくアキラとBチ
フユ。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

ラップトップやノートを机に広げ、転
送ログデータやアキラの持ち帰った資
料とにらめっこするチフユ。

○同・同（昼）

エーテルポータルがちょうど収まる大
きさの円形送電装置を施設内に組み上
げていくアキラとチフユ。

○赤城諸島第一島・Bチフユ宅前（夕）

倉庫から引っぱり出してきたパーツを
アキラがクラシックカーに積み込んで
いく傍ら、反重力PFを試すBチフユ。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（昼）

送電装置の設計図を机に広げ、話し合
いながら食事をとるアキラとチフユ。

○同・同（夕）

プラグを接続し、A世界帰還のための
装置一式が完成する。

アキラ・チフユ「できた！」

○同・廃試験場内（夜）

年越し蕎麦と共に乾杯するアキラとチ
フユ。

机の近くには少し年季の入ったガスス
トープ。

装置が廃試験場内に造られたのに合わ
せ、反重力車も中に停められている。
トランクは開いており、中には反重力
PFに加え、エーテル石の入った白い袋。

アキラ「もう大晦日になっちゃったな」

チフユ「今夜は日付越えても起きてる人が多い

でしようから、向こうに帰るのは明日の夜
ね」

アキラ「まあみんな寝てる時間の方がいいか」

蕎麦をすすする二人。

チフユ「私は明日は夜まで最終調整かな」

アキラ「俺はこっちのチフユに礼でもしに行

こうかと。エーテル石の欠片をあげると

かどう？」

チフユ「絶対喜ぶわね！ あれ盗品だけど」

アキラ「（苦笑）ちよつと業が深いか」

二人の笑い声。

○赤城島大橋・道路上（夜）

同時刻。

第三島へ向けて車を走らせる、帰宅中

の軍人A。

軍人A「ん？」

視線の先は第二島の廃試験場。

建物の窓からわずかに光が漏れている。

眉を顰める軍人A、ハンドルを切る。

○赤城諸島第二島・廃試験場外（夜）

光が漏れる廃試験場へ近づく軍人A。

木がすぐ近くに生えている窓を見つけ、
木に登り窓を覗き込む。

薄暗い施設内に、円形の放電装置と、
その前に止められた反重力車。

アキラとチフユは死角となっており見
えない。

軍人A「なんだ……？」

○赤城諸島第一島・商店街（昼下がり）

翌日。

終戦百周年記念祭により、街は人で溢
れかえっている。

斜めがけ鞆を身に着け商店街へやって
きたアキラ。

アキラ「おお……」

華やかな正月の飾りつけの中、警備に
あたる軍人も。

アキラ、少し離れたところにこちらの

世界のアキラとシュンが二人で歩いて
いるのを見かけ、慌てて横道に入る。

アキラ「(小声)頼むから穏便に帰らせてくれ
よ」

○ Bチフユの作業部屋前(昼下がり)

遠くに黒い雲。

扉をノックするアキラ。

扉が開き出てくるチフユ。

Bチフユ「アキラ君」

アキラ「約一週間、本当に助かった」

くすんだ灰色をしたエーテル石の欠片
を手渡すアキラ。

Bチフユ「帰っちゃうのね。 ん？ あ、こ
れ！」

アキラ「エーテル石。 お土産」

Bチフユ「ありがとう！ 大切にする」

アキラ「(照れ臭そうに)その、学校が始まっ
たら、こっちの世界の俺にもよろしく頼む
よ。 多分それにもがつつくと思うから」

Bチフユ「そうする。　じゃあ……気を付けてね」

アキラ「(自信に満ちた目で) うん」

欠片を握りしめるBチフユ。

アキラ、立ち止まる。

アキラ「化学のテキスト返してもらってないわ」

Bチフユ「言わなければバレないと思ったのに」

アキラ「おい」

Bチフユ「(笑う) 冗談冗談」

○赤城諸島第一島・第一島駅前(夕)

黒い雲が島の上を覆う。

アキラ、第二島に向けて歩いてっていると、駅前にて特設の演壇の上に立つ軍上層部の男がスピーチを行っている場所に出くわす。

それを聴く市民たち。

どこか緊張した空気。

眉間にしわを寄せた数人の人々が、近くの路地に控えている。
駅前の時計が十六時ちょうどを示す。
路地から一斉に人々が飛び出し、演壇に火炎瓶を投げ込み始める。

アキラ「な!!」

周囲が騒然とし、スピーチを聞いていた市民が蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い始める。

近くを歩いていたアキラ、混乱した市民に跳ね飛ばされ転倒する。

そのはずみでポケットから落下するトランシーバー。

人波に揉まれるアキラ。

× × ×

騒ぎは収まり、暴動を起こした人々も走り去っていく。

ゆっくりと立ち上がりズボンの汚れをはらうアキラ。

黒い雲から雪が降り始める。

アキラ「はあ……。あれ」

トランシーバーをしまっていたポケットに何もないことに気付く。

アキラ「おい、嘘、どこに」

周囲を見回すアキラ。

少し離れたところで怪訝そうな顔を浮かべてトランシーバーを拾い上げる軍人B。

それを見たアキラ、絶句。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夕）

扉を開け放ち必死の形相で飛び込んでくるアキラ。

装置の最終調整を行っていたチフユ、体を跳ね上がらせ振り返る。

チフユ「ビックリしたあ！ な、なに!!」

呼吸が浅いアキラ。

アキラ「トランシーバー、軍の人間に拾われ
ちまった」

チフユ「うそでしょ!!」

アキラ「……」

チフユ、取り乱しそうになるも、落ち着いて呼吸を整える。

チフユ「エーテル技術の結晶のあのトランシーバーは絶対にここに置いては帰れない。……私たちの世界と同じなら、軍の回収した不審物は一度現場責任者の部屋に行くはず」

アキラ「誰か分かるの？」

チフユ「(苦い顔)……橋田。あの大男よ」

○Bチフユの作業部屋(夕)

Bチフユ「(Aチフユと全く同じトーン)うそでしょ!!」

手を合わせ頭を下げるアキラ。足元には反重力PF。

アキラ「ほんとごめん。また潜入のために裏口を開けといてほしい。今回は橋田の部屋がある中央棟の方を」

Bチフユ、天を仰ぐ。

Bチフユ「これっつきりだからね！」

○軍事基地裏（夜）

本州でも大粒の雪が降っている。

軍事基地の外壁沿いにBチフユのクラシックカーが停車。

助手席から飛び出してきたアキラ、トランクから風呂敷に包まれた反重力PFを取り出しつつ、車内のBチフユと会話。

Bチフユ「じゃあ前と同じ所から裏口を目指

して、私は裏口開けたらここに戻ってる。

何かトラブルあったら今回は私がこれ持つてるからね！」

チフユの使っていた方のトランシーバ

ーを手に持って見せるBチフユ。

アキラ「了解、頼んだ！」

発着場へ走っていくアキラ。

○軍事基地・発着場外壁沿い（夜）

先日と同じ場所、同じ手段での潜入を試みるアキラ。

反重力PFを包んでいた風呂敷を解き、スカーフで顔を覆う。

アキラ「サンタさんも休日出勤する時代かつての」

先日使用した敷地内地図で中央棟裏口の位置を確認し、反重力PFを起動するアキラ。

反重力PFがピピピと音を鳴らす。

アキラ「ん？」

問題無く動作し外壁を乗り越える。

アキラ「頼むぞ今だけは……」

○同・全景（夜）

雪が降り積もり始める。

敷地内の時計が十八時四一分を示す。

軍事基地中央に位置する、十三階建てのひとときわ大きな中央棟。

小走りですここに入っていくBチフユ。

○同・中央棟内（夜）

周囲を警戒しつつ廊下を走る B チフユ。
問題無く裏口にたどり着き安堵のため
息。

B チフユ、裏口の鍵を開け扉を開く。

○同・中央棟裏口前（夜）

薄く積もった雪の上を反重力 PF 片手に
駆け抜けるアキラ。

アキラ「本当に警備スカスカだな」

中央棟裏口の扉が開き、こちらに手を
振る B チフユの姿。

○同・中央棟内（夜）

アキラ、中央棟に突入。

アキラ「本当にありがとう！」

B チフユ「橋田の部屋は十階！ 頑張ってるね、
信じてるから！」

笑みを浮かべサムズアップし、階段を
駆け上がるアキラ。

○同・正門（夜）

中央棟から出て正門へ向かうBチフユ。

正門には作業員A、Bや複数人の軍人

と軍用トラックが集まり待機している。

それを見て歩みを止めたBチフユ、ポ

ケット内のトランシーバーのスイッチ

を切ってから、待機する作業員Aに話

しかける。

Bチフユ「あの、第一島の暴動関連でまた何

かあったんですか？」

作業員A「ああいや、俺たちは別件でね。第

二島に不審な機械があるらしく、その調

査に駆り出された。今は橋田さんが来る

のを待ってるよこだ」

○同・中央棟内・橋田の部屋（夜）

誰もいない橋田の部屋。

慎重に扉を開けるアキラ、すぐに机の

上にトランシーバーが置かれているの

に気付く。

アキラ「よしよしよし」

トランシーバーを手に取りスイッチを
入れるアキラ。

アキラ「(小声)あー、あー、聞こえてる？ 無

事回収できた、今からそっち戻る」

返事は無い。

アキラ「使い方うろ覚えなのかな……」

その場を立ち去ろうとするアキラ。

アキラ「……ん」

窓の外、正門にトラックと軍人が集ま
っていることに気づき窓へ駆け寄る。

アキラ「(正門の方を見下ろして)なんだ？」

振り返るとホワイトボードが壁にかか
っている。

そこに「本日のスケジュール」の記載。

○同・正門(夜)

Bチフユ「な、なるほど。最近なんか物騒
ですな」

作業員A「ほんとは一時間早く向かう予定だ

ったんだけど、例の暴動で後ろ倒しになっ
たんだ」

呼吸が浅くなっていくBチフユ。

目は明後日の方を向いている。

Bチフユ「えーと。 ……つまり？」

○同・中央棟・橋田の部屋（夜）

アキラ「え」

ホワイトボードに「十八十九時〇〇分
第二島不審機械調査」の記載。

作業員A（声のみ）十九時に現地着、つてと
こかな」

アキラ、壁の時計に目をやる。

十八時四九分。

部屋に足音が近づく。

扉が開く。

大男の影。

橋田「誰だ」

○同・正門（夜）

雪が激しくなる。

作業員 A 「まあ君には関係無い仕事だから。

うう寒っ。 ほら帰りな」

目が泳いでいる B チフユ。

B チフユ「え、ええそうさせてもらいますね」

顔が引き攣りそうなのを何とか抑えな

がら、早歩きで去っていく B チフユ。

B チフユ（小声）まずいまずいまずいまずい

○軍事基地裏（夜）

停車させていたクラシックカーに飛び

乗りエンジンをかける B チフユ。

アクセルを踏みつけ勢いよく発進。

B チフユ「向こうの私に知らせないと！ ア

キラ君、どうにか一人で脱出して！」

○同・中央棟・橋田の部屋（夜）

緊迫した空気。

双方無言。

張り詰めた表情のアキラ。

反重力PFの持ち手を握る手に力が入る。

橋田「(反重力PFを見て)まさかこの前の」

橋田が入ってきた方とは違う扉へ走り出すアキラ。

橋田、瞬時に反応し追う。

○軍事基地・中央棟・廊下(夜)

扉を勢いよく開き飛び出すアキラ。

少し遅れて追う橋田。

アキラ、階段を駆け上っていく。

橋田「待て！」

○赤城諸島第一島・商店街(夜)

黒いクラシックカーが第二島の方面へ

爆走していく。

懐中時計を取り出すBチフユ。

一八時五二分。

Bチフユ、険しい表情。

さらにアクセルを踏み込む。

○軍事基地・中央棟・最上階廊下（夜）

息を切らしながら走るアキラ。

橋田、息一つ乱さず追う。

廊下の端に追い詰められたアキラ。

じりじりと距離を詰める橋田。

橋田「諦めろ」

アキラ、窓を開け放ち、反重力PFをグ

ライダー代わりにし飛び下りる。

橋田「何っ！」

○軍事基地・中央棟裏（夜）

重力を相殺しつつ垂直に降りていくア

キラ。

反重力PFからピピピと音。

バッテリーが不足し落下の勢いが強ま

る。

地面が急速に迫る。

アキラ、一瞬狼狽えるもすぐに反重力

PFのパネルを外し、バッテリーをポケ

ットから取り出し交換。

地面からほど近い場所で赤白いエーテルの光が炸裂。
激しく息を乱しながらなんとか着地に成功するアキラ。
地面に落ちた使用済みバッテリーを拾い上げ、すぐに走り出す。

○軍事基地裏（夜）

先ほどBチフユの車が停まっていた場所。

息を切らしながら余裕無く外壁を乗り越えふらつきながら着地。

アキラ、周囲を見渡すもクラシックカーもBチフユも見えない。

アキラ「（トランシーバーに向かって）チフユ！ チフユ！」

Bチフユ「（トランシーバー越し）アキラ君！

ごめん今第二島向かってる！ 事情は……」
アキラ「分かってる！」

軍事基地最寄り駅ホームに蒸気機関車

が入ってくるのが見える。

アキラ「列車で戻る！ 急いであいつに知らせてやってくれ！」

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

装置の最終調整を行うチフユ。

○軍事基地正門前の道（夜）

ますます激しくなる雪の中を駅に向かって走るアキラ。

蹴り上げた土混じりの雪が飛び散る。

○軍事基地・正門（夜）

軍人たちが凍えながら待つ中、橋田が雪煙をあげながら現れる。

作業員 A 「あ来た」

橋田、何も伝えずトラックに乗り込み急発進。

ざわつく軍人たち。

○赤城諸島第二島・駐車場（夜）

Bチフユの車が突っ込んでくる。

若干スリップしながらも停止。

車から飛び出し廃試験場へ走るBチフユ。

○軍事基地最寄り駅（夜）

蒸気機関車の汽笛。

ほとんど人の居ない駅舎内を駆け抜けるアキラ。

その中響くアナウンス。

駅員「（アナウンス）えー本日かなりの積雪が予想されますためこちらが下り最終便となります、お気を付けてください」

○海上列車・車内（夜）

汽笛の音。

人の居ない最後尾車両に飛び込むアキラ。

ボックスタイプの席が並び壁にガスラ

ンタンが掛かっている車内。

アキラ「くそっ早く発車してくれ……！」

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

装置の最終調整を行うチフユのもとへ、

思い切り扉を開き突っ込んでくるBチ

フユ。

チフユ「うわああ！ えっ私!! なに！」

Bチフユ「軍のやつらがここに来る！ 急い

で装置を起動して！」

チフユ「えっ!!」

血走った目でトランシーバーを取り出

すBチフユ。

Bチフユ「(チフユのもとへ駆け寄りながら)

アキラ君大丈夫!! こっちは今第二島着い

た！」

チフユ「な、何が起きてるの!!」

○海上列車・車内（夜）

上着の袖をまくり腕時計を見るアキラ。

時刻は十八時五四分。

アキラ「チフユ居るか！ 十九時にそこに軍の調査が入る！ 急いで転送準備！」

○軍事基地最寄り駅・ホーム（夜）

駅員「（アナウンス）えー間もなく発車いたします」

ホームに突っ込んでくる橋田。

○海上列車・車内（夜）

アキラ「俺は今そっち向かう列車に乗った！だから」

駅のホームへ目をやるアキラ、橋田がこちらの車両に向かって走ってきていることに気付き青ざめる。

アキラ「やっぱ……！」

列車の扉がスチームを吐き出しながら閉まるも、ギリギリで車内に駆け込む

橋田。

その手にはリボルバー。

目を大きく見開くアキラ。

発砲する橋田。

計四発の弾丸がアキラへ向けて発射される。

アキラ、すんでのところでは椅子の陰に逃げ込む。

弾丸が椅子や壁のランタンに命中する。列車が動き出す。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

Bチフユの持つトランシーバーに銃声が入り込む。

二人のチフユ「うわっ！」

橋田にトランシーバー越しのチフユの声が届くのを嫌がったアキラ側がスイッチを切ったため、一切の音がトランシーバーから聞こえなくなる。

状況を理解したチフユ、動き出す。

チフユ「装置とポータルの起動を間に合わせる！ 手伝って、それぞれの専門分野よ！」

Bチフユ「オッケー！ 任せて！」

○海上列車・車内（夜）

四発の弾を凌ぎ切ったアキラ。

しかしそこに迫る橋田。

アキラ、必至に辺りを見回す。

近くには撃ち落とされガラスの覆いが

割れたガスランタン。

それを手に取る。

反重力PFからエーテルバッテリーを取

り出し、それをランタンの火に突っ込

む。

橋田のもとへランタンが投げ込まれる。

橋田「なっ」

直後、赤白い大閃光を放ち始めるラン

タン。

車両全体が閃光で包まれる。

不意打ちで視界を潰され、焦って残り

の二発を発射する橋田。

アキラ、反重力PFを持って車両前から

脱出し、連結部脇の梯子を上っていく。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

窓の外、遠くで赤い光。

Bチフユ「な、なに……？」

いち早く反応したチフユ、トランシーバーを手取る。

○海上列車・屋根の上（夜）

連結部横の梯子を上り、うめき声を上げながら屋根に登ってくるアキラ。

トランシーバーを引っ張り出しスイッチを入れる。

チフユ「トランシーバー越し」……ラ君！

何があったの！ 大丈夫!!」

アキラ「大丈夫なわけないって！ 今、列車で橋田に追われてる！」

チフユ「うそ!!」

アキラ「頼む助けに来てくれ！ 今、第一島に向かう橋の後半に差し掛かったとこ、屋

根の上だ！」

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

チフユ「分かった、今行く！」

作業を続けるBチフユにトランシーバ
ーを渡すチフユ。

チフユ「私、向こうに助けに行くから、その
あとはこれで連絡を！ 発電装置の方お願
いね、信じてるから！」

Bチフユ「……うん！」

双方アイコンタクト。

反重力車に乗り込むチフユ。

エーテルエンジンの重く激しい駆動音。
タイヤのホワイトトリボンが光り、車体
が浮き上がる。

○海上列車・屋根の上（夜）

吹雪の中、列車前方へ走っていくアキ
ラ。

橋田も屋根へ上りアキラを追う。

積もった雪に何度も足を取られるアキラ。

ついに最前車両の屋根上。

息を乱し振り返るアキラ。

橋田が迫る。

その場にへたり込むアキラ。

その時、蒸気機関車の黒煙の中が赤く輝き、黒い空飛ぶクラシックカーが現れる。

雪の粒に乱反射したエーテルの閃光を正面から受けた橋田、再び視界を奪われる。

チフユ「(窓を開けて) 乗って！」

アキラ「マジで死ぬかと思った！」

二人を乗せた反重力車は遙か上空へ上り、第二島へ向け飛び去っていく。

○赤城諸島第一島上空・反重力車内(夜)

スカーフを外し再度腕時計を確認する

アキラ。時刻は十八時五七分。

トランシーバーを取り出すアキラ。

アキラ「そっちは大丈夫!!」

Bチフユ「(トランシーバー越し)オッケーと言いたいところだけど、そっちの二人次第かな!」

アキラ「奴らが来るまであと三分ある! オッケーさ!」

Bチフユ「(トランシーバー越し)そっちじゃない!」

アキラ「どっちさ!」

Bチフユ「(トランシーバー越し)十九時に間に合わせるために発電出力を無理やり引き上げてる! モタモタしてると爆発するわよ!」

引き攣った顔を向かい合わせるアキラとチフユ。

チフユ「(正面を向き直す)かつ飛ばすわよ!」

チフユ、思い切りアクセルを踏み込む。

○赤城諸島第一島・商店街(夜)

華やかにライトアップされた商店街の
上空を、時速百五十キロは下らない速
さで赤い光の帯が飛んでいく。
ざわつく人々。

○赤城諸島第一島上空・反重力車内（夜）

トランシーバーを手に取るチフユ。

チフユ「今すぐに避難して！ あとは私たちがポータル作って突っ込むだけ！ そのトランシーバーも、お土産としてあげる！」

Bチフユ「トランシーバー越し」うん！ 二人とも、無事を祈ってる！」

アキラ「（開ききった瞳孔）こりやとんだ大冒険だな！」

チフユ「今に始まったことじゃないでしょ！」

チフユ、高度調節レバーを一気に奥に
倒し車体を降下させていく。

○赤城諸島第二島・全景（夜）

赤い光の帯が旋回運動しつつ高度を下

げていく。

○同・廃試験場内（夜）

ひしゃげたシャッターをはね飛ばし突っ込んでくる反重力車。横滑りするようにして円形の送電装置の前へホバー状態で静止。

室内に置かれた装置のあらゆるメーターの数値が振り切れている。

円形の送電装置の横には、垂れ下がった白色の旗。

○同・同・反重力車内（夜）

転送機能のスイッチをオンにするチフユ。

車体前方に光の塊が生成され始める。

アキラ「これいつになったら大丈夫なの！」

チフユ「その白い旗が揚がったら！」

車内が赤い光で包まれていく。

○赤城島大橋・道路上（夜）

橋田不在のままトラックで第二島へ向
かっている軍人たち。

第二島から赤い光が漏れているのが見
える。

ざわつく軍人たち。

その道路脇の歩道。

トランシーバーを握りしめ、吹雪の中

その様子を見守るBチフユ。

○赤城諸島第二島・廃試験場内（夜）

光に包まれ全体が赤白く染まる。

装置類はとうに限界を迎え、タンクや

パイプはガタガタと震えている。

○同・同・反重力車内（夜）

アキラ「まだなの!!」

チフユ「まだ!」

○同・同（夜）

ついに装置の固定具が弾け飛び、パイプは炸裂し始める。
吐き出されたスチームで部屋の天井付近が満たされていく。
送電装置脇の白い旗が揚がる。
一気に送電が行われ、ポータルのは紫色に変化。

○同・同・反重力車内（夜）

アキラ、チフユ「きた！」

チフユ、思い切りアクセルを蹴りつける。
反重力車が急発進し、ポータルへ飛び込む。

部屋を満たす紫色の光が最高潮に達する。
部屋を満たす紫色の光が最高潮に達する。

○同・第二島入口（夜）

軍のトラックが停車したところで、島全体が煌々とした紫色の光で覆われる。

○赤城島大橋・道路上（夜）

その光景に目を奪われるBチフユ。

○赤城諸島第二島・全景（夜）

数秒かけて紫の光が収まった直後、爆発し始める赤城第二島発電装置試験場。噴き出した炎が施設の扉、シャッター、窓ガラスをすべて吹き飛ばす。海に静寂が訪れる。

○赤城諸島第一島・上空（夜）

紫の破片を周囲に散らし現れる反重力車。

煌々と光る紫色の穴が炎を吐き出し、次第に消滅する。

○赤城島高校・校庭（夜）

屋根に雪を積もらせた校舎。
ゆっくりと降下し着陸する反重力車。
アキラ、チフユ、無言でゆっくり車か

ら出てくる。

力の抜けた顔を向かい合わせる二人。

と、二人のスマホに一斉に大量の通知が流れ込んでくる。

再度顔を向かい合わせる。涙がにじむ。

抱きしめ合って崩れ落ちる二人。

○赤城諸島第三島・全景（夜）

優しく降る雪。

雪の積もった静かな住宅街。

雪とエーテル灯の光でどこか幻想的な

雰囲気。

○アキラ宅・玄関（夜）

ふらふらと扉を開け家の中に入るアキ

ラ。

アキラ「（か細い声）ただいま」

アキラの母「（リビングの方から）おかえり、

早かったね」

アキラ「んー」

虚ろな目で自室へ上がっていくアキラ。

○同・自室（夜）

変わらないアキラの自室。

アキラ、トランシーバーをデスクの上に置き、そのままベッドへ倒れこむ。ものの数秒で眠りに落ちる。

○同・同（朝）

翌朝。

ぬいぐるみを抱きながら眠るアキラ、目を擦りながら起き上がる。

デスクの上のトランシーバーが朝日で照らされる。

それを手に取る。

デスクの端で落ちそうになっている、カメラのカタログ。

アキラ、もう一方の手でカタログを手に取りしばらく見つめた後、トランシーバーとともにデスクの真ん中に置く。

ぼたりとベッドに倒れこみ、スマホを
触り始めるアキラ。

アキラ「……ん？」

シユンからのメッセージ通知。

「おはよう！ 昨日ちゃんと寝られ

た？ 暴動に吹雪、大変だったね」

しばらくフリーズするアキラ。

と、チフユからメッセージ。

「私たちが居ない間面白いことが起こ
つてたみたい、明日私の家来て！」

○チフユの作業部屋（昼）

こちらの世界でも散らかっているチフ
ユの部屋。

チフユ「アキラ君。入って入って」

笑顔で出迎えるチフユ。

アキラ「なんか友達から妙なメッセージが来
てたんだけど、それに昨晚も親に『早かつ
たね』とか言われた気が」

チフユ「それがね」

立ち止まり、アキラの方を向くチフユ。

チフユ「同じ期間、別の並行世界の私たちが、この世界の私たちのフリをしてくれてたみたいなの」

アキラ「え？」

机から奇妙な小型の機械が入った箱を持ってきて見せるチフユ。

チフユ「その証拠に、これ！」

アキラ「何これ」

チフユ「小型発電ユニット！ 別世界の私たちの置き土産！」

アキラ「えーと。 ……え!!」

ことの流れを理解し、顔を上げるアキラ。
ラ。

チフユ「アキラ君！」

ニヤリと笑みを浮かべるチフユ。

チフユ「次はどんな世界に行きたい？」